

待降節第四主日

2013.12.22

マタイ 1・18-24

待降節も第四主日を迎え、クリスマスもまじかに迫ってきました。今日のミサで私たちが祈り求めたいことは唯一つ、今年もこうして迎えるクリスマスが私たちの心に喜びをもたらすものとなりますようにということです。クリスマスを喜びのうちに迎えるために最も必要なことは、どんなにわずかでもいいから、私たちの心のうちにゆとりを持つということです。クリスマスは私たちをおとぎ話やメルヘンの世界に誘う魅力を持っています。クリスマスを喜びのうちに迎えるためには、クリスマスの持つそのような魅力に身も心も委ねるためのゆとりが必要なのです。日々の生活の重荷に押しつぶされ、身も心も疲れ果て、将来への不安に心ふさがれたままでは、周囲のクリスマスの雰囲気も、虚ろで、騒々しいものにしか感じられないことでしょう。現実の生活の厳しさに引きずられるままの、心の中の苦々しい思いを静め、クリスマスが祝うことに心向けることが出来たなら、それだけで、私たちは私たちの心が一番必要としているぬくもりと、しなやかさを取り戻すことが出来ることでしょう。クリスマスにはそのような不思議な魅力があります。

クリスマスを中心としたこの季節のミサで、私たちは、マタイ福音書とルカ福音書の初めに語られている、イエス・キリストの誕生前後の物語と、ヨハネ福音書冒頭の、みことばの受肉の神秘を歌う賛歌に耳を傾けます。イエス・キリストのご生涯の初めを語るこれらの福音は、イエス・キリストへの信仰を生き、その信仰を後世に伝えた最初の教会の中で、次第に明らかになって行った、人となられた神の子イエス・キリストの神秘に私たちを招き入れます。イエス・キリストのご生涯の初めを語るクリスマスの物語は、二千年の歴史を超えて今の私たちの教会に受け継がれてきた、イエスの弟子たちを中心とする最初の教会のイエス・キリストへの信仰を表明しています。これらの物語において、その中心に表明されているイエス・キリストへの信仰は、今日の福音で見れば、イエス・キリストは旧約聖書の預言者が告げているインマヌエルとして私たちのこの世界に来られたお方であるということです。インマヌエルとは「神はわれわれと共におられる」という意味であると説明されています。

弟子たちはどのようにして、このような信仰に導かれて行ったのでしょうか。弟子たちはイエスとの最初の出会ってから、イエスの十字架の死に至るまで、お側近くにあって見聞きしたことを通して、さらには、弟子たちだけが体験し、その証人となることに彼らのいのちまでもかけることができたイエスの復活という出来事を通して、自分たちが弟子として付き従ったナザレのイエスのうち

に「神が共にいてくださる」ことを、イエスこそが預言者が告げていたインマヌエルであることを知ることが出来たのです。

預言者の告げたインマヌエルの預言は、旧約のダビデ王と深く結ばれています。「ダビデの家よ、聞け。あなたたちは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、わたしの神にももどかしい思いをさせるのか。それゆえ、主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」今日の第一朗読で聞いた預言者のことばです。おとめから生まれる男の子はインマヌエルと呼ばれ、それが神がダビデの家に与えられるしるしであると、預言者は告げています。何のしるしかといえば、主なる神がダビデ王に与えられた約束は忘れられてはいないということのしるしです。その約束とは、サムエル記下 7 章 16 節に記されている、預言者ナタンを通してダビデ王に与えられた主なる神の約束です。「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」ダビデ王に告げられたこのことばは、ダビデの時代からイエスの時代までおよそ千年、預言者イザヤが活躍した時からでもおよそ七百年の歴史を超えて、イスラエルの人々の心に、事あるごとに去来し、将来への期待を育んだ、メシア待望のもととなっている、主なる神の約束のことばです。

イエスの誕生を語る福音書の物語は、イエスこそがインマヌエルとして、旧約聖書に記されているこのような主なる神の約束を実現したお方であるとの信仰を表明しているのです。なんと、夢のような話ではないでしょうか。イエスの時代には、ダビデ王家そのものは、はるか昔に消滅していました。それにもかかわらず、イエスの誕生を語る福音書の物語は、ガリラヤのナザレの大工ヨセフの息子として育てられたイエスが、預言者が告げているインマヌエルその人だと言っているのです。今日の福音に登場するナザレの大工として生きたヨセフはダビデの子孫の一人だと言っているのです。イエス・キリストに対する、このような信仰表明は、現代人である私たちにとってだけではなく、イエスの同時代の多くの人々にとっても、夢物語のように思われたにちがいません。

私たちが信じるイエス・キリストは、夢のような神のみわざの実現を私たちの現実の中にもたらしてくださったお方です。現実の社会の中にあって、現実の生活を生きる私たちは、現実を引きずられたままでは人間として生きてゆくことは出来ません。現実を受け入れて生きてゆくためにも、私たちは現実に意味を与える夢を必要としているのです。夢があつてこそ、現実に打ちのめされることなく、厳しい現実を生きてゆく力を見出すことが出来るのです。聖書が語るイエスの誕生物語は、現実を生きる私たちには夢物語のようにしか思えないかもしれません。けれども、そのような私たちは、それを必要としているのです。現実を生きる私たちの心が開かれ、イエスの誕生を語る福音を福音とし

て受け入れることが出来る時、私たちは、インマヌエルとして私たちの現実を共に生き、導いてくださるイエスを私たちの心に向かえることが出来るのです。

今日の福音の主役であるヨセフは、夢の中で聞いた天使のことばを信じ、夢にしか過ぎないと思われる神の指示に基づいて、マリアを受け入れ、生まれてくるインマヌエル、イエスの父となったのです。聖書にわずかにしか記されていないヨセフが生きたヨセフの人生は、ヨセフがイエスの誕生に先立って見た夢を受け入れたことに掛かっていたのです。

最初にも述べたように、クリスマスは私たちを夢の世界に誘うような魅力に満ちています。それは厳しい私たちの現実の中に私たちの手によって人工的に生み出された夢の世界なのでありません。それは、神の導きの中にある私たちの現実の世界を語っているのです。神がその御子を遣わし、その御子を通して照らし出しておられるわたしたちの現実の世界を語っているのです。私たちは、私たちの信仰に基づく、このような私たちの現実を包み込む夢を必要としているのです。そのためにも、迎えるクリスマス、現実に疲れきっている私たちの心が開かれ、ヨセフが見た、神からの夢の世界を味わう恵みを願いたいと思います。

カトリック高円寺教会
吉池好高